

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26760009

研究課題名(和文) 東南アジアの少数民族における祭祀植物の利用と地域景観形成に関する研究

研究課題名(英文) Study on the regional landscape created by utilization of ritual plants of the hill tribes of Southeast Asia.

研究代表者

大野 朋子(OHNO, Tomoko)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：10420746

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：民族や地域の特性が現れやすい祭祀植物の利用と栽培に着目して、地域景観の形成について民族植物学的フィールド調査を行った。その結果、タイ北部の赤・ラフ族は、祭祀の際には必ずワタ *Gossypium* spp. を使用するため、集落の祈りの場に栽培、維持し続けている。沖縄の芋麻やネパールのマリーゴールドも同様に祭祀植物として栽培されている。信仰と結びついた植物利用は、高い必然性から地域景観の重要な構成要素となっていることを明らかとした。

研究成果の概要(英文)：We investigated ethno-botanically about how the regional landscape created by the use and cultivation of ritual plants of mainly the hill tribes in Southeast Asia. As a result, Lafu-red tribe living in Northern Thailand necessarily needs cotton (*Gossypium* spp.) during animism ritual. Therefore, they have cultivated and maintained that one for a long time around the temple and shaman's house. We also surveyed about the use and cultivation of ritual plants in Okinawa and Nepal in addition to Thailand. People living in Sakishima islands, Okinawa believe Ramie (*Boehmeria nivea*) as a one of the plants to protect itself against misfortune. On the other hand, Marigold (*Tagetes* spp.) is very important ritual plants for the Hindus in Nepal. It became clear that the regional landscape created by these plants linked to faith are cultivated and maintained according to high necessity.

研究分野：緑地環境学 民族植物学

キーワード：地域景観 祭祀 少数民族 タイ 栽培 信仰 ワタ 植物利用

1. 研究開始当初の背景

植物資源は、古くより人間生活の基盤を形成し、食物や生活材を供給するだけでなく、祭祀にも関わって地域・民族に固有の文化と歴史を創出し、植物利用の文化的特徴は、固有の人文景観を形成する重要な要因となる。

東南アジアで豊富な資源量を持つ多様な高いタケ類は、様々な利用の文化を育み、生活や祭祀にも利用され、地域の文化的景観を形成している。しかし、近年、近代化に伴う物流の増加や人間生活のグローバル化により文化融合が急速に進み、伝統的な地域固有の景観が変質、喪失しつつある。地域の生物文化の固有性は慣習(行為)と生物(物)が一体となって維持されなければ残らないが、これまでの地域研究では、生物のみ、あるいは文化のみが解析の対象とされ、生物と文化を相互に捉えた研究は極めて少なく、多様性の維持機構は十分に議論されてこなかった。とくに地域研究においては植物種を正確に同定した研究が少なく、実態の把握がおくれている。また、住民による利用する種への曖昧な認識は、本来用いるべき種を変容させ、伝統文化の崩壊に繋がると危惧される。

たとえば、東南アジアには目的に応じて多種多様なタケ類を利用する文化が存在し、タケという植物は民族の固有性を支える重要な植物資源であることが明らかとなった(大野ら 2008, 2009, 大野 2013)。タイ北部に住むモン族は、葬送の際に必ずケーンと呼ばれる竹製の笙を演奏する。死者の魂を来世へ導くとする非常に重要で不可欠な笙では、材料となるタケ類が特別に扱われている。移住型生活スタイルのモン族は、このタケを伴って移動するが、その際にタケを居住集落近くで栽培する。これは、タイ北部一円の 35 箇所のモン族の村で確認される。ケーン(笙)に使用されるタケは、温帯性の *Sinobambusa intermedia* cf. であるが、その自生地はタイ北部には確認されていない。ほかの少数民族もタケ製の笙を持っているが、集落周辺に自生するタケを素材に使用し、栽培ではなく山取りしている。モン族は笙を必ず葬送に使用するが、他の少数民族は、笙を葬送には使用せず結婚式などのハレの際に使用し、音楽を楽しむ楽器としている。モン族の笙は、単なる楽器ではなく葬送の際に民族のアイデンティティを示す行為とセットとなっている。モン族が *S. intermedia* cf. を特に大切に、栽培行為を伴って供給を安定的にしていると同時にタケという植物は人間をトレガーとして広がっている。

地域の人文景観の構成要素である植物の多様性が、地域原産の植物、地域外から導入される有用植物、民族の移動に伴う植物から成立していると考え、モン族における笙のタケを実証してきたが、さらに人々の植物利用には、たとえば笙のように祭祀に関わって種レベルまでこだわって栽培される種の他に、タケであればよいもの、また、使用で

きればタケでなくても代替できるものという依存度の違う類型があることに気がついた。それらの依存度によって、住空間における植物の配置や量が違っていると着実に至った。

これまで予備調査を行ってきたラフ族の支族の一つアカ・ラフ族は、呪具の一つとしてワタを使用していた一例を確認した。これは別の支族、クロ・ラフ族ではまだ確認できていない行為で、植物利用の違いが確認できれば支族を識別できる。植物利用の文化は民族の基層を構成する極めて重要なものであり、特に祭祀に係る植物利用には、民族の固有性が強く現れ、植物の関わる人文景観の成り立ちや地域の特性を論考するにあたっては、この祭祀植物をモデルとして利用の違いと種に対する依存度の違いに関わる住空間への配置や量を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、民族や地域の特性が顕著に現れやすい祭祀植物をモデルとして地域・集落景観が民族文化を背景とした植物利用や依存度の違いに伴う人間生活や住居周辺における植物の植栽配置や量によって形成されることを景観スケールの違いも含め実証する。

3. 研究の方法

調査地として多様な植物利用と宗教、儀礼の文化が現存し、景観スケールの異なるタイ北部(チェンマイ・チェンライ・メーホンソン県)、沖縄県先島諸島(石垣島・西表島)、ネパール中央部(カトマンズ・チトワン)とした。

小スケールの景観として設定したタイ北部の少数民族の集落においては、これまでの調査で祭祀に関わってワタの使用が見られた。そのため、ワタの利用法と栽培場所を中心として 23 箇所の集落で聞き取り調査をした。赤・ラフ族の集落を基本とし、そのほか異なる支族である黒・ラフ族およびリス族、モン族、カレン族との比較をし、民族植物学的フィールド調査を行う。さらに中スケールの景観として沖縄県先島諸島、大スケールとしてネパール中央部において、祭祀、宗教に関わる植物の聞き取り調査および、ワタと同様にその利用方法、栽培実態について現地聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1) タイ北部のワタの利用と栽培

2014 年から 2016 年にかけてタイ北部に住む少数民族の集落でワタの栽培と利用について調査を行った。表 1 は民族別にワタを栽培、利用していた集落数を表している。

聞き取りにより、「ワタ」はカポック *Ceiba pentandra* とコットン *Gossypium* spp. の 2 種の植物から採取していることが分かった。こ

表 1 各民族におけるワタ栽培とその利用
がおこなわれていた集落数

民族	調査集落数 (箇所)	<i>Celtis</i> <i>pentandra</i> の栽培 (箇所)	<i>Gossypium</i> spp. の栽培 (箇所)	ワタそのもの <i>Gossypium</i> spp.の利用*	お守り糸の有無
赤・ラフ	7	2	7 (1)	5	○
黒・ラフ	3	0	0	0	○
リス	4	0	(2)	0	○
モン	2	0	0	0	○
カレン	7	0	2	0	○

*: ワタそのものの利用に限る。 () 内の数値は現在は無いが以前に栽培していた集落数

これらの栽培の有無について、*C. pentandra*は赤ラフ族の2集落で確認できたが、他の21集落では見当たらなかった。一方、*Gossypium* spp.は、以前の栽培歴も含めると赤・ラフ族は調査集落すべてで栽培していた。リス族やカレン族にも2集落で栽培がみられるが、厄災を防ぐお守り糸としての利用に限っている。赤・ラフ族のみが、ワタそのものを宗教上の呪具の材料として使用していることが明らかになった。主に首、手首に巻くお守り糸は、民族に関わらず、広く使用されているが、近年は購入した糸の使用が主流となっていた。

*C. pentandra*は*Gossypium* spp.と同じようにワタが採れるが、呪具や祭祀には利用しないという。糸としての使用は繊維の長さから適さず、主に枕の中綿利用であった。繊維、糸などの日用品は、現在では市場で購入するのが普通で、*C. pentandra*の集落での栽培はほとんどなくなってきた。このことは赤・ラフ族でも同じである。一方、*Gossypium* spp.は赤・ラフ族の祭祀や呪具など特別な行為には必ず必要とされ、集落のお寺近くやシャーマン(祈禱師)の家の庭に大事に栽培、維持されている。民族移動の際には*Gossypium* spp.の種を伴って行き、新たな居住地で再び栽培するという。

*C. pentandra*と*Gossypium* spp.は共通してワタの採取が可能だが、赤・ラフ族固有の祭祀や呪具に関わって*Gossypium* spp.のみが強固に栽培、維持、利用されて続けていることが明らかになった。*Gossypium* spp.のもつ意味は未だ不明だが、この結果は特定の植物への依存度の違いを表しており、代替えすることのできない祭祀植物は、民族、集落という小スケールの固有の景観を構成する要素となっていると考えられた。

(2) 沖縄先島諸島の苧麻栽培と利用実態

2015年から2016年に沖縄県石垣島と西表島で祭祀植物について現地調査を行った。先島諸島では、独特の宗教儀礼が存在し、祭祀植物も多様である。その中で、タイ北部で使用していたお守り糸とよく似た紐を発見した。この紐は、先島諸島の方言でブーと呼ばれている。タイ北部の*Gossypium* spp.ではなく、苧麻(カラムシ)とよばれるイラクサ科の植物*Boehmeria nivea*の繊維を紡いでつくられていた。使用方法は、不幸ごとがあった



写真1 民家の庭で栽培される苧麻

際に手首や首に巻く。体の中の魂が外に出ていくのをつなぎとめるためだという。この使用は、タイの少数民族と同じであった。

苧麻は、守り紐だけでなく、八重山上布の材料としても使われる。この上布は、現在では無形重要文化財として扱われ、ごく一部で作られているにすぎない。しかし、かつては民家の庭に栽培され、ごく一般的な植物だったという。苧麻は、大規模栽培はほとんどなく、民家の庭で栽培、維持されているが(写真1)、栽培苧麻は、野生の苧麻と交雑しやすいため、栽培地は外壁で囲われ、質の良いものを株分けしながら維持している。本調査では、石垣島で6箇所、西表島で1箇所の苧麻栽培を確認できた。現在、収穫された繊維は主に上布の糸として利用されるが、それ以外にも日常使いのアンツクとよばれる鞆の材や守り紐に使われていた。

苧麻の栽培や利用は、先島諸島の文化を反映し、地域の景観を創っているが、伝統的技術や知識の喪失とともに材となる良質な苧麻をも失いつつある状況であった。

(3) ネパールにおけるマリーゴールドの利用と野生化

ネパールでは、ヒンズー教徒、仏教徒が多く暮らしており、宗教上の行事が非常に多く日常的に行われている。中でもティハールと呼ばれるヒンズー教徒の祭りは、規模も大きく、使用される植物にも特色がみられる。5日間連続で行われるティハール際は、それぞれ日ごとに祭られる事物が異なるが3日目のラクシュミー女神の日には、マリーゴールドの花を大量に飾る習慣がある。

マリーゴールド *Tagetes* spp. はメキシコ原産の植物である。しかし、ネパールでは、このマリーゴールドが至る所で見られる。通常の供花としても利用されているが、ティハール祭のラクシュミーの日には必ず必要とされる植物として定着していた。ラクシュミーはお金を司る女神としても信仰されており、「金」を連想させるオレンジ色のマリーゴールドの花を建物の窓や玄関などの入り口に飾り、ラクシュミーを招き入れるという。そのため、マリーゴールドの需要は非常に大きく、首都カトマンズの市場では大量のマリーゴールドが売られていた。

各家庭でマリーゴールドは大量に必要となるため、庭やベランダで栽培されているが、零れ落ちた種から野生化したものも非常に多く存在する。野生化し、拡散したマリーゴールドであっても、祭祀に必ず必要となるため、雑草として扱わず、それらの花も使用していた。カトマンズ郊外では、大規模なマリーゴールド栽培もおこなわれていたが、需要があまりにも大きいため、インドからの輸入に頼らざるを得ないのが実情であった。このようなマリーゴールドへの依存は、ネパールのあらゆる場所でマリーゴールドが生育する実態につながっている。

これらの調査から、本来、ネパールには自生しないマリーゴールドが、祭祀という文化によって必要不可欠な植物となり、外来種の拡散ではあっても地域を代表する景観要素となっていたことが明らかとなった。

以上の3地域において、祭祀植物の栽培と利用の実態を現地調査してきた。これらはそれぞれ、景観スケールの異なる実態であったが、文化、特に宗教の関わることで利用する植物種への依存が強く表れ、栽培、維持されてきたことがわかった。このことは同時に植物の配置や必要とされる植物資源量の違いにも影響して地域固有の植物景観を形成することが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

- ① Rie Miyaura・Tomoko Ohno・Hisayuki Maenaka・Ketut Sumiartha・Hirofumi Yamaguchi, A Particular Silhouette of Human-Influenced Coconut Trees in Hindu Bali, Ethnobotany Research and Applications, 14, 405-421, 2015
- ② 大形徹・山里純一・大野朋子・佐々木聡・董涛・池内早紀子, 《千金翼方・禁經》と日本奈良市出土二條大路咒符木簡, 中国人民大学-美国羅格斯大学 首届国際道教文化前沿論壇 論文集, 122-131, 2016

[学会発表] (計 2件)

- ① 大形徹・大野朋子、建物などを守る辟邪呪物—中国・日本・タイなどの事例をもとにして—、形の文化会、2014、大阪
- ② 大形徹・山里純一・大野朋子・佐々木聡・董涛・池内早紀子, 《千金翼方・禁經》と日本奈良市出土二條大路咒符木簡, 中国人民大学-美国羅格斯大学、2016、中国・天岳幕阜山

[図書] (計 1件)

- ① 伊藤一幸、上田善弘、上村修二、梅本信也、大形徹、大澤良、大野朋子、岡田博、金子務、亀山慶晃、河瀬眞琴、木崎香織、管開

雲、久保輝幸、児島恭子、坂口翔太、鈴木貢次郎、副島顕子、田中政司、中村治、林みどり、平木康平、前中久行、水野杏紀、三村真紀子、宮浦理恵、森元真理、保田謙太郎、山口聰、山口裕文、山本悦津子、李景修、王仲朗、北海道大学出版会、「中尾佐助 照葉樹林文化論」の展開 - 多角的視座からの位置づけ (山口博文・金子勉・大型徹・大野朋子編)、2016、862

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
番号：
取得年月日：
国内外の別：と

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
大野朋子 (OHNO Tomoko)
神戸大学大学院・人間発達環境学研究所・
准教授
研究者番号：10420746

(2) 研究分担者 ()
研究者番号：

(3) 連携研究者 ()
研究者番号：

(4) 研究協力者 ()